

教員自身が高いスキルを身につける必要があるからだ。教員と企業人が一対一の間人関係を結べるようになり、両者の距離は一気に縮まった。

山形県当局が長井工業高校の統廃合方針を撤回した背景には、こうした地域ぐるみの物心両面からの支援体制への評価があった。

「ロボットのまち」として再興 省略

人材育成と教育とは両立できるのか

地域の人材育成という発想をつきつめれば、「社会に必要な人材を育てるために教育という手段を利用する」考え方に行きつく。しかしこれに対しては、「教育は人材育成の道具ではなく、あくまで個人＝人間の可能性を伸ばすために行われるべきだ」という反論が考えられる。一般的な意味でのキャリア教育とは、まさにこの立場で教育をとらえる考え方だ。では、この二つの考え方は、お互いに矛盾するものなのだろうか。これは教育を考えると、いつもポイントとなる難しい問題だ。一つ言えるのは、そもそも教育は、人間を社会化し、社会と人間を結びつける営みだということ。だとすると、上記の二つの考え方はどちらも簡単に否定することができなくなる。

工業高校が地方小都市を再生する (4) ～誰が「普通の子」の幸せを考えるのか

筆者が取材の過程でもっとも強く感じたのは、学校づくり、まちづくりに賭ける関係者の静かな熱意だ。率直に言って、長井で行われていることは特に目新しい内容ではない。画期的なカリキュラム、教育方法で飛躍的に生徒の学力が伸びた、といった派手なサクセスストーリーもない。あるのは強い危機感と、それをバネにした長期的で遠大な構想。再生に向かい、それぞれが自分の持ち場で、今できることを地道にやろうとする粘り強さだ。長井工業高校のキャリア教育の意義、成果が、本当の意味で評価されるのは10年、20年先のことだろう。しかし現段階でも、同校から社会に巣立った若者の証言を得ることで、その教育経験がのちの人生に与えた影響について考察するヒントを得られるのではないか。そう考えた筆者は、取材の最後に、1990年代～2000年前後の転換期にあった長井工業高校で学び、現在も長井市内で暮らす若者に話を聞いてみることにした。

一人目は、2002年春に電子システム科を卒業した五十嵐早苗さんだ。現在、五十嵐さんは、当連載で何度もご登場いただいた長井工業高校体育文化後援会会長の吉田功さんが経営する吉田製作所に勤めている。担当は、ワイヤーカット放電加工機という装置を駆使した精細金属部品の製造だ。顧客からの厳しい精度要求に応える製品づくりには、コンピュータプログラミングの専門知識と、装置の「くせ」を知り尽くし微調整しながら使いこなす職人技が求められる。

長井市内で両親と姉一人の家庭に育った五十嵐さんは、高校進学段階で自分の将来についてはっきりした見通しを持っていただけではなかった。ただ、できれば早く地元で就職して自立したいと考えていたこと、パソコンに興味があったことから、長井工業高校を志望した。一般的には珍しい女子の工業高校進学についても、抵抗感はなかったという。「親は、地元の公立なら安心だし経済的にも助かると

という意見でした。米沢あたりまで通えないことはないんですが、片道1時間はかかります。第三セクターの長井線で通学となると、交通費もばかになりませんから。市内には長井工業高校と長井高校があるんですが、進学校の長井高校はちょっと大変。それならコンピュータ技術が学べる長井工業高校がいいと思いました」

「中学校の先生は、やりたいことがはっきりしているならいい学校だよ、と言ってくれました。毎年先輩もたくさん進む学校ですし、電子科なら女子も学年に十数人はいると聞いていたので、特に不安はありませんでした」

「打てば響く」生徒たちは「あの高校に行きたい」という気持ちから

当時の長井工業高校は、廃校危機を何とか乗り越えた時期。学校と地域がコミュニケーションを深め、産業界や親たちの声を生かした学校づくりが進められたことは第2回で述べた。県内の高校としてはじめて国家資格である技能検定合格者が出たのは、五十嵐さんが中学3年生だった1998年秋のことだ。五十嵐さんの両親や中学校教員が長井工業高校への進学を後押ししたのも、こうした学校の姿勢が地域で評判になっていたせいかもしれない。

五十嵐さんは、機械・電子・化学工学の旧3学科で募集が行われた最後の年度（1999年）の入学生にあたる。2年生まで旧校舎で学び、3年生になったときに新校舎に移った。在学中、大きな過渡期にあった長井工業高校を、一生徒としてどのように見ていたのだろうか。



「私の下の学年から福祉システム科が新設され、女子が一気に増えたのはよく覚えています。学校の雰囲気明るく、行事なども盛り上がるようになりましたから。印象に残っているのは、この時期から生活指導がちょっと厳しくなったことです。悪い意味ではなく、先生方の『気合い』のスイッチが入ったというか……。服装の乱れ一つにしても、きちんとチェックされるようになりました。今思えば、校舎が新しくなったのをきっかけに、学校を生まれ変わらせようと燃えていたのかなと思います」

この五十嵐さんの回想に関しては、別の学校関係者の興味深い証言もある。学科再編が行われた2000年ごろから、「打てば響く」生徒が増えた。結果、授業のみならず部活や行事、学級運営等でも教員の指導が空回りせず、学校が活気づいたというのだ。この時期、同校の入学難易度が急に上がったわけではない。ただ客観的に言えるのは、市内の中学校出身者を中心に、長井工業高校を「主体的に選んで」入学した生徒が増えたことだ。

五十嵐さんに、卒業後6年目の現在から振り返って、長井工業高校に行って良かったと思うことを尋ねてみた。すると二つの点について答が返ってきた。

「まず一つは、いまの仕事にもつながる、いろいろな実習授業を経験できたことです。長井工業高校では、電子科の生徒も、機械を使った加工など、幅広くものづくりの基礎を学ぶカリキュラムが組まれていました。もともとパソコンを使った情報工学のようなことに関心があったんですが、やってみると工作のようなものづくりも意外におもしろくて。もちろん教科書を使った授業もたくさんあるんですが、印象に残っているのは頑張って寸法どおりの作品を仕上げたときのうれしさですね」

「もう一つは、いい仲間がたくさんできたことです。生徒会の役員をしたり、剣道部のマネージャーをしたりで、同じ学年だけでなく、上級生とも下級生とも仲良くなれました。特に女子同士は、人数が多くなかったこともあって、中学時代にあまり話したことがなかった子とも深い話をするようになりました。実習の授業は、共同作業が多く、いろいろ助け合う機会もあります。正直、私はもともとそんなに社交的な性格ではないんです。でも少しずつですが、人間関係の中で自然に自分を出せるようになりました」

高校が同世代の絆を育んだ 省略

求人票ではなく、まちなかで顔を合わせる関係性 省略

ロボットとの出会いで進学先を決める 省略

「とにかく体験、体験、体験」。カギは課題研究の活用 省略

一度きりの人生を、生まれ育った町で、人と人をつなぎたい 省略

個人の成長が新しい「社会」を生んでいく 省略

“長井工業方式”がある、と考えてはいけない

まずひとつ。1990年代なかばに長井工業高校が直面した「危機」は、ここ十数年、日本全国の地域社会と教育現場の接点で生まれたいきみの象徴とっていいと思う。長井工業高校は、多くの関係者の努力によって、再生に向けた道を歩み始めた。しかしその背景には、長井という地域が特殊な条件に恵まれている幸運があったのではないか。言い方を換えるなら、その他多くの高校がそのまま長井工業高校のマネをしようとしても、成功の道は険しいと筆者は考える。

長井には企業城下町としての歴史の遺産というべき高い技術力を持つ中小企業群がある。長井工業高校のものづくり教育、キャリア教育は、この地域産業界の有形無形の支援があったからこそ成り立った。そしてそれ以上に重要なのは、これら企業群が、そのまま同校卒業生の有力な就職先になっていることだ。

いま地方部の高校で、このように地域に就職先が十分にあるところはほとんどないはずだ。人手不足で高校生への求人が増えているというニュースも、日本中でごく一部の例外的に景気がいい地域にしかあてはまらない。高卒でまともな就職がないからと、ひとまず大学や専門学校へ進学したとしても、結局は問題の先送りにすぎない。高卒であろうと大卒であろうと「田舎にはろくな就職先はほとんどない」のが現状だからだ。

若者が「学校から企業社会へ」スムーズな移行を果たすには、学校側の努力だけでなく、企業社会側の受け入れ態勢がカギになる。長井工業高校の事例では、地域の産業界、地域の大人たちが、ある意味では学校関係者以上に、この点を真剣に考えていた。これは非常に重要なポイントとして強調しておきたい。

社会の受け皿なくして、キャリア教育は成り立たない

仮に学校がいくらいい教育を行い、生徒にキャリアを切りひらく力をつけさせてやったとしても、社会にその力を発揮していく場がない。だとしたら、キャリア教育とは一体何のためにあるのか。この点を抜きにキャリア教育を考えても意味がないと筆者は思った。

筆者の感想、宿題の第二点目は、長井工業高校のものづくり教育で養成される生徒の能力と、これからの社会で求められる実践的な能力のギャップについてだ。さらに踏み込んで言うなら、工業高校からそのまま就職、という従来多数派だったキャリア形成を自明のものにせず、大学等への進学道を広げていく動きをどう考えるかだ。この点については、みずからも地域の工場経営者である吉田功さんの声を聞いてほしい。

「正直な話、これからの時代、基礎的なものづくり技能を身につけていても、それだけで一生食べていくのは難しいですよ。よほどの名職人になればともかく、そんな仕事はどんどん外国にとられていく。この流れは止まりません。日本人は、もっと付加価値の高い仕事をしないと生き残れない。昔は工業高校卒業ベースで、幸福な人生を考えられた。でも、今はそれじゃ足りない。工業高校で学ぶレベルはあくまで基礎の基礎。その上にどれだけ知識と技術を積み上げられるかが勝負になる」「これは単に若者の将来を心配して、他人事として言っているんじゃない。長井の産業界の人材育成の課題として言っているんです。長井工業高校からも、大学なりに進んで、現場のものづくりの上流にあたる設計、開発などの専門知識を学ぶ人がたくさん出てきてほしい。そういう人材が長井の企業に入り、発注元の大メーカーの社員と対等にわたりあえるようにならないと、地域全体の将来が行き詰ってしまう」

卒業生の4割は進学を選ぶようになった

この問題意識は、長井工業高校側にもある。進路指導は、あくまで本人の希望をかなえるようサポートするのが基本方針。その上で「工学部等への大学進学希望者には、個別に徹底的に補習を行う等、特別の体制を組んで指導にあたっている」（渡部教頭＝2008年4月より校長）。結果、現在では卒業生の約6割が就職、4割が進学という進路状況になっている。2007年春には、学校創立以来はじめて、県唯一の国立大学である山形大学工学部に一般入試から合格者を出した。また2008年には、私立東北芸術工科大学との間で教育交流協定も締結した。今後教育実践・研究に関する情報交換および交流、大学教員の高校への出張講義や遠隔講義、生徒の大学での講義等の聴講などを行っていく予定だ。長井工業高校では、県内を中心に、さらに多くの大学や短大とパートナーシップを組むことも検討しているという。高校から大学への接続に関しては、いわゆる大学全入時代を迎え、大学側も学生の確保に必死になっている。工業高校等も含めた多様な高校からの入学者受け入れのため、推薦入学制度なども充実してきた。ただし、少なからずの大学でそれがたんなる入学定員充足に向けた人数合わせになってしまっている現実もある。キャリア教育を実効性あるものにしていく教育機関同士の連携はどこまで進んでいるのだろう。ポジとネガの両面を冷静に検討する必要がある。

三点目の宿題。これはより根本的なテーマだ。筆者に考える機会を与えてくれたのは、またも吉田功さんの言葉だった。

「誤解される言い方かもしれないけれども……この世に生まれて、誰もが総理大臣や弁護士や医者や大会社の社長になれるわけじゃない。たまたま小さな田舎町に生まれた。家はお金持ちじゃない。勉強はあまり好きじゃない。特別な才能があるわけじゃない。そんな子もたくさんいる。むしろそっちの方が多数派でしょう。日本が右肩上がりの時代にはなんとかあった。そんな連中も、本人なりに頑張れば幸せになった。でもこれからはそんなに甘くない。誰かが、彼ら彼女らの幸せな人生を真剣に考えなくちゃ。そのための教育が必要なんじゃないですか。ところがいまの教育論は、肝心のそこを忘れてるんじゃないか」

「普通の子」の幸せを考えるのは、普通の子の周りの大人だ

吉田さんの、きわめて「正直な」この発言は、長井工業高校の教育実践、長井のまちの人材育成にこめられた思いをズバリ言い当てていると思う。もちろん吉田さんだけではない。取材を通じて出会った長井の人びとは、皆こうした認識を共有していた。筆者はその重みをあらためて実感している。経済のグローバル化が進み、産業構造が大きく変化して、日本人の「仕事」「働き方」はすっかり様変わりした。高度成長期には共存共栄の建前が保たれていた都市部と地方部の格差が拡大した。キャリア形成能力と直結して個人間の「勝ち組」「負け組」格差も広がった。そして社会はますます流動的に変化し、将来の見通しは不透明になっている。

そんな今考えるべきなのは、吉田さんが言う、「田舎の特別な才能もない」子ども、若者のキャリアを保障する教育とは何か、というテーマではないか。少し一般化して、「人間と社会を底から下支えするキャリア教育とは何か」と言い換えてもいい。これは長井のひとびとに限らず、日本人全体が直面している巨大な課題であるはずだ。筆者も、また別の教育現場に足を運び、考えを深めていくつもりだ。

「工業高校の生徒も、もっと夢を持ってもらいたい」という吉田功さん（撮影・佐藤）